

【研究ノート】

## 大学院生のための研究法

Instruction in getting a doctoral degree for graduate students

熊上 崇

KUMAGAMI, Takashi

### 1. はじめに～大学院生のために

2013年からコミュニティ福祉学部所属してから、大学院生の修論発表会や博論発表会に参加する機会が何度かあった。そこで驚いたのが、博士後期課程に5～6年と長期在籍している院生もいることである。

私自身のことを振り返ると、裁判所で仕事をしながら社会人大学院に通学し、3年間で学位を取るために研究に励んでいた。なぜならば、年間の学費が56万円かかるからで、ボーナスや毎月の給料から工面して支払っていたが、それでも生活費との両立が大変であった。また、仕事もあるので気力と集中力にも限界があり、博士後期課程の3年をがんばるのが限度であった。本学の院生も学費を博士後期課程で5～6年間払い続けることは経済的に重い負担となる。そこで、能力があれば3年で博士後期課程を修了できるような指導システムを作ることが必要であり、6年間で学位が取れないとなると、個々の資質だけでなく、指導システムに問題があると考えざるを得ないだろう。

学位取得過程は、孤独で地道な作業のくり返しである。文献研究を行うために、国内外のデータベースからさまざまなキーワードで探し、それを整理してレビュー論文を作成する作業、量的研究や質的研究のために調査計画をたて、倫理委員会の審査を経て、実際に調査を実施してデータを分析する作業がある。こうした作業は長期にわたる集中力が求められる。

加えて、調査終了後には、きちんとした査読システムのあるジャーナルに投稿し、査読意見に回答して受理されることが必要となる。社会科学系や理工系の博士課程では、学位申請のための最低ラインとして2本以上の査読付き論文が要求されるところがほとんどである。

投稿論文が受理されるまで、国内雑誌では半年や1年以上かかることも珍しくなく、その間、自分が博士後期課程を修了できるのか、精神的な忍耐を要求される。また、中間発表会や予備審査会での質疑応答（海外ではディフェンスと呼ばれる、教員からの質問に対して自分の論文をディフェンスしなければならない）をクリアしなければならない。そのような過酷な精神状態に長期間置かれるのは精神的によくはない。

本稿では、筆者の経験も元にながら、どうすれば博士後期課程の3年間で学位を取得できるのかについて、その方法を提案しつつ、学位取得システム上の課題についても提示することとし

たい。また、博士後期課程だけでなく、修士課程（博士前期課程）や卒業研究をする学生にも方法論の一つとして読んでいただければ幸いである。

なお、本稿における論文や研究方法は、社会科学やリハビリテーションなどの分野を対象としたものである。

## 2. リサーチクエストionsをつくろう

多くの院生が悩むのは、研究題目やテーマをリサーチクエストions（研究設問）に絞り込むことであろう。大学院に進学したからには、自分のやりたい研究テーマは何となく決まっているはずである。たとえば、あるコミュニティ（地域や職域など）にとって有効な福祉システムは何なのか？新たに開発したリハビリテーション技法の効果は何なのか？など、各人の問題関心に基づく研究テーマがある。難しいのは、それをリサーチクエストionsにどのように落とし込んでいくかである。

そこで、私なりに、リサーチクエストionsの作成方法を3つ考えてみた。

- (1) グラフ、方程式にしてみる
- (2) 独立変数、従属変数を決める
- (3) 英文に訳してみる


### (1) グラフ、方程式にしてみる（実験群と対照群、プログラム評価）

自分の研究テーマが、実際にどんなデータを生み出すのか、イメージしてみるための方法である。そこで例として「納豆はダイエット効果がある」という研究テーマがあるとしよう。これは、福祉分野では、ある介護や福祉プログラムの効果研究、スポーツにおけるトレーニングプログラムの効果を示す研究等を念頭においたものである。

一番単純なものは、納豆を食べる前と食べた後で体重を量る研究である。これで体重が減ると、納豆ダイエットは効果があると言えるのか？答えはもちろん否である。納豆ダイエットの効果を計るためには、健康状態や性別、年齢などを統制（ある程度そろえた）した対照群と比較する必要がある。

では、「納豆ダイエット群」と「納豆ダイエットなし群」でプログラム前後の体重を比較すれば良いのだろうか？

これも疑問が残る。対照群としては、ウォーキングをする群など、これまでのダイエット法との比較をしなければ、新たなダイエット法との開発とはいえない。そこで、納豆ダイエット法の本当の評価をしたいのであれば、「納豆ダイエット群（実験群）」「何もしない群」「これまでの代表的ダイエット群（軽運動など）」の3群間の比較ということになるだろう。

福祉プログラムやトレーニングプログラムの効果研究においても、このような群間比較を行うのが基本であるが、まずは、研究計画のイメージをたてるために、どんな研究結果が出そうなのか、仮説を立てるために、 図1のようなグラフを作ってみよう。

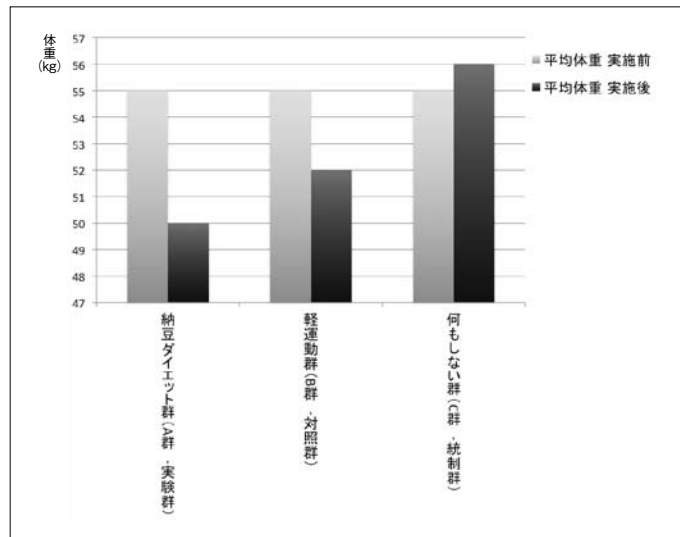


図1 3群間の比較の研究デザインの例

また、グラフは群間比較だけでなく、個別あるいは少人数の事例研究も考えられる。

その場合のプログラム評価として代表的なものに、「ABデザイン」「ABABデザイン」「BABAデザイン」などがある。この場合、Aがベースライン（何もしていない時期）、Bがプログラム実施時期である。AとBを交互に実施することで、プログラムの効果を示すものである。

これもグラフを書いてイメージしてみよう。

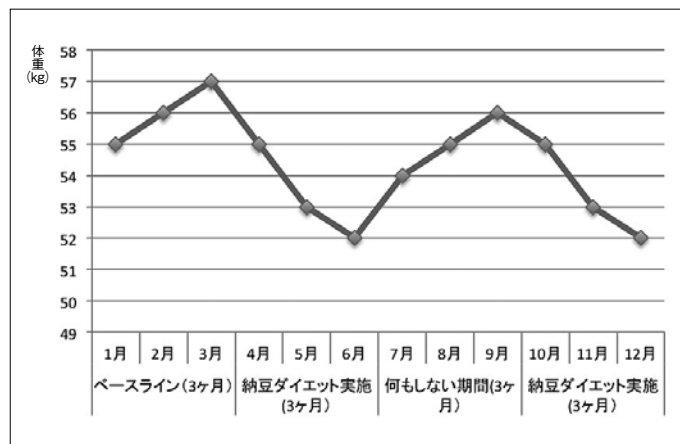


図2 ABABデザインの単純化した例（納豆ダイエットによる体重の変化）

図2の例では、何もしない時期（ベースライン）では体重が増加し、納豆ダイエットをした時期は、体重の減少が見られているから、このプログラムは効果がありそうだといえる。ただし、これは限定された一事例であり、個別の要因もあるから、一般化することはできないので、納豆

ダイエットに関しては、やはり一事例だけでなく、多数症例での検討があると説得力が増すだろう。

しかし、ABABデザインが有効なこともある。たとえば、難病の方に対する心理支援プログラムなど対象者数がもともと少ない研究や、少人数の学級における生徒の行動の変化などを調べる行動療法や特別支援教育分野では、このデザインはよく使用されている。

こうした、プログラム評価方法について、詳しく学びたい方のために、安田、渡辺（2008）によるプログラム評価法の書籍がある。23個のプログラム評価デザインが掲載されているので、自分の研究テーマにあったデザインにあてはめてみてはどうだろうか？

## (2) 独立変数、従属変数を決める

研究テーマについて、グラフを書いて見て研究仮説を可視化したあとは、独立変数と従属変数を決めて、それをどのように測るのかを考えてみる。独立変数とは、簡単にいえばグラフのx軸にあたるもの、従属変数はy軸にあたるものである。「納豆ダイエット法」であれば、たとえば、納豆ダイエットの時間や日数を独立変数、体重が従属変数とすれば、プログラムにかけた時間や日数が体重にどのように影響するのかを見ることができる。

もちろん、研究では、このような単純な因果関係ではなく、さまざまな要因が重なってくるであろう。たとえば、納豆ダイエットであれば、元々の体重(a)や運動の経歴(b)、持病の有無(c)、食生活(d)、血圧(e)などにより、プログラムの効果は違ってくるはずである。そこで、体重という一つの従属変数に対して、複数の独立変数が関与しているとなると、 $\text{体重} = ax_1 + bx_2 + cx_3 + dx_4 + ex_5 \dots$ という方程式を考えてみる必要がある。こうした方程式（重回帰式）をいくつか書いて見ることで、研究アイデアを可視化することもできるだろう。

## (3) 英文に訳してみる

研究テーマやタイトルが、英文で簡潔に表現できるときは、明快なりサーチクエスチョンといえる。逆に深読みしないと分からない題目や、一度で英語で伝えるににくい題目は、明快なりサーチクエスチョンとはいえない。英文にする過程で、自分のサーチクエスチョンの整理にもなる。

以上に、簡単に研究デザインの仕方を書いたが、これに対して「コミュニティや福祉など、人間集団を対象にした研究では、あてはまらないのではないか」という批判があるかもしれない。しかし、欧米では、たとえばある教育政策や貧困対策が、実際にそのコミュニティにどのような効果を挙げているかの大規模な研究が多数あり、それが政策の実施に反映されている。たとえば、貧困と学力の増進を明らかにするための「ペリースクール」実験では、乳幼児期、または思春期以降に学習支援を行うと、どちらが効果があるかという研究を行い、それにもとづく政策も実施されている。貧困研究であれば、現金給付と現物給付のどちらが有効か、などという公的な福祉

支援計画でも実施されている。阿部(2014)は、子どもの貧困に関する実験的な研究は政策の策定にあたって不可欠だが、日本ではほとんど実施されていないと指摘しており、今後、プログラムを政策に反映させるためにも、群間比較をする研究が必要と述べている。大学院レベルでは、大規模な研究はできないかもしれないが、仮説をたてることはできるはずである。それを小規模集団で実施し、その効果が確認できれば、政策立案にとっても有益な研究となろう。

### 3. D1でやること、M1でやること

#### (1) レビュー論文(文献展望論文)をつくる

大学院に入ってD1またはM1で何をするか、具体的なアイデアを述べてみたい。D1、M1でやることは先行研究をまとめることなのだが、それだけにとどまらずに、ぜひともレビュー論文を書いて、投稿し受理させるところまで目指してほしい。

そのメリットは以下のとおりである。

1. レビュー論文はインパクトファクター(被引用回数)が高い。
2. レビュー論文投稿により、査読付き論文が1本できる。
3. そのまま博論の序論(第1章)に転用できる。

2014年度にコミュニティ福祉学部客員研究員として在籍されていたオーストラリアのエディンバラ大学の野坂和則教授によると、レビュー論文の多くは博士課程の学生によって書かれているという。また、インパクトファクターが高いのはレビュー論文を掲載する雑誌であるとのことであった。インパクトファクターとは、その雑誌の掲載論文数に対してどれだけ引用されているかを示す数値であり、ネイチャーやサイエンスなどの一流誌ではインパクトファクターが高いのが当然だが、レビュー論文を掲載する雑誌も、同様にインパクトファクターが高い。これにより、博士課程の学生の論文が引用される回数が増え、その院生にとっても学会での知名度が増す仕組みになっているという。わが国でいえば、レビュー論文は「総説」論文として、その業界の権威が書くものというイメージがあるが、実際に博士論文を書くには、序論で先行研究のレビューが必要であり、まずレビュー論文を作成して投稿し、博論に序章として転載すれば、博論そのものの価値も上がると考えられる。

レビュー論文の作成方法は、順序として

1. データベースで自分の調べたいキーワードを入れる。その際、国際誌のデータベースPubMedなどを入れる。
2. 文献データをRefworksにとりこむ。
3. 文献ごとに、エクセルで研究種類別や事例研究別に分類する。
4. 分類した結果をもとに、先行研究の到達点や理論的枠組みを明示する。
5. 自分のリサーチクエストションが、先行研究にない新規性(オリジナリティ)と社会的意義があることを明示する。

The screenshot shows the RefWorks web interface. At the top, there is a navigation bar with 'レコード' (Records), '参照' (References), '検索' (Search), '参考文献' (References), 'ツール' (Tools), and 'ヘルプ' (Help). A search bar is present with the text 'データベースを検索する' (Search database) and a '検索' (Search) button. Below the navigation bar, there are buttons for 'フォルダの作成' (Create folder), '参考文献の作成' (Create reference), and 'レコードの作成' (Create record). The main content area displays a list of records under the heading 'レコード > すべてのレコード'. The records are listed with their IDs and titles. Record ID 95 is highlighted, showing its title: 'Asperger Syndrome and Autism: A Comparative Longitudinal Follow-Up Study More than 5 Years after Original Diagnosis'. The source is 'Journal of Autism and Developmental Disorders, 2008, 38, 1, Plenum Press., New York'. Other records (96, 97, 98, 99, 94) are also visible with their respective titles and sources. On the right side, there is a sidebar with sections for 'ニュース' (News), 'サポート' (Support), 'フォルダ' (Folders), 'クイックアクセス' (Quick access), and '利用状況' (Usage status). The '利用状況' section shows '260 レコード', '1 フォルダ', '0 共有項目', '0 添付ファイル', and '0/209715200 バイト使用'.

図3 Refworksの画面の例（筆者の画面）

ここで、便利な文献リストを作成できるRefworksについて説明したい。EndNoteなど高価なソフトウェアを導入することなく、無料で利用できる。まず、立教大学図書館のサイトからRefworksのアカウントを作成する。次に、CiniiやPubMedで文献を検索し、「Refworksに取り込み」のボタンをチェックすることによりRefworksに書誌情報が蓄積される。Refworksの上記画面で「参考文献の作成」ボタンを押すと、APAスタイルなど様々なスタイルの文献リストが自動的に生成される。

Refworksを使えば論文の最終段階で、論文リストを作成する必要がなくなる。

具体的な例として、筆者の作成したレビュー論文を見てみる。

筆者は、MIで、広汎性発達障害（PDD）のある触法事例の文献研究をした（熊上，2008）。データベースは国際誌はPubMed、国内誌はCinii、キーワードは「pervasive developmental disorders, asperger, crime」などとして、論文ごとに、触法事例の年齢、性別、IQ、非行類型などを整理した。表1はその表の一部である。

表1 レビュー論文記載の文献表の例(熊上, 2015)

著者	題目	ジャーナル	出版年	事件内容	年齢	性別
1 Baron-Cohen	An assessment of violence in a young man with Asperger's syndrome	J. Child Psychol. Psychiat. 29(3): 351-360	1988	暴行	21	♂
2 Chesterman	Case report: Asperger's syndrome and sexual offending	J. Forensic Psychiat. 4: 555-62	1993	性非行	22	♂
3 Cooper, S.A., et al.	Possible Asperger's syndrome in a mentally handicapped transvestite offender	J. Intellec. Res. 37: 189-94	1993	性非行	38	♂
4 Donna M. Schwartz-Watts	Asperger's Disorder and Murder	J. Am. Acad. Psychiatry Law 33: 390-5	2005	殺人	20	♂
5 Donna M. Schwartz-Watts	Asperger's Disorder and Murder	J. Am. Acad. Psychiatry Law 33: 390-3	2005	殺人	22	♂
6 Donna M. Schwartz-Watts	Asperger's Disorder and Murder	J. Am. Acad. Psychiatry Law 33: 390-4	2005	殺人	35	♂
7 Everall, Lecouteur	Firesetting in an Adolescent boy with Asperger's Syndrome	Br. J. Psy. 157, 284-287	1990	放火	16	♂
8 J. Arturo Silva, et al.	The case of Jeffrey Dahmer: Sexual Serial Homicide from a Neuropsychiatric Developmental Perspective	J. Forensic Sci. 47(6)	2002	殺人	18	♂
9 Kohn, Y. et al.	Aggression and Sexual Offense in Asperger's Syndrome	Isr. J. Psychiatry Relat. Sci. 4: 293-299	1998	性非行	16	♂
10 Mawson, D., Grounds, A., Tintam, D.	Violence and Asperger's syndrome: A Case study	Br. J. Psy. 147: 566-569	1985	放火、毒物、擲石、住居侵入、銃刀、性的接近	44	♂
11 Milton, J., et al.	Case history of co-morbid Asperger's syndrome and paraphilic behaviour	Med. Sci. Law 42: 237-44,	2002	性非行	30代前半	♂
12 ES. Chen, et al.	Asperger's Disorder: A case report of repeated stealing and the collecting behaviors of an adolescent patient	Acta. Psychiatric Scand. 107: 73-76	2003	窃盗	21	♂
13 Palermo, M.T.	Pervasive Developmental Disorders, Psychiatric Comorbidities, and the Law	International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology, 48(1): 40-48	2004	脅迫	19	♂
14 Palermo, M.T.	Pervasive Developmental Disorders, Psychiatric Comorbidities, and the Law	International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology, 48(1), 40-49	2004	脅迫	33	♂
15 Palermo, M.T.	Pervasive Developmental Disorders, Psychiatric Comorbidities, and the Law.	International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology, 48(1): 40-50	2004	性非行	30	♂
16 Scragg, P., Shah, A.	Prevalence of Asperger's Syndrome in a Secure Hospital	British Journal of Psychiatry 165: 679-682	1994	殺人未遂	不明	♂
17 Scragg, P., Shah, A.	Prevalence of Asperger's Syndrome in a Secure Hospital	British Journal of Psychiatry 165: 679-682	1994	放火	不明	♂
18 Scragg, P., Shah, A.	Prevalence of Asperger's Syndrome in a Secure Hospital	British Journal of Psychiatry 165: 679-682	1994	暴行	不明	♂
19 Scragg, P., Shah, A.	Prevalence of Asperger's Syndrome in a Secure Hospital	British Journal of Psychiatry 165: 679-682.	1994	暴行	不明	♂
20 Scragg, P., Shah, A.	Prevalence of Asperger's Syndrome in a Secure Hospital	British Journal of Psychiatry 165: 679-682.	1994	性非行	不明	♂
21 Scragg, P., Shah, A.	Prevalence of Asperger's Syndrome in a Secure Hospital	British Journal of Psychiatry 165: 679-682.	1994	殺人	不明	♂

これにより、広汎性発達障害の事例研究論文のレビューの結果、広汎性発達障害の触法事例は、「知的障害のない」人による「性非行」が多く、その発生基盤として「対人接近時の過誤」が多いことを明らかにした。これが次のリサーチクエストにつながるようにしている。

## (2) ミニ調査研究、予備調査をする

M1でやっておきたいこととして、ミニ調査研究をあげておきたい。指導システムとしては、これを「必修科目として単位化する、発表会で質疑応答することで単位を修得する」ことで、確実に研究手法の基礎を身につけることができる。

ここで量的調査や質的調査を実際に体験してみて、リサーチクエストを作るトレーニング、質問紙の作成方法、統計解析やプレゼンテーション、報告書にまとめるトレーニングをすることができる。このトレーニングをしないままに、いきなりM2で修士論文を書こうとすると、

前述のような対照群のないプログラム研究などをしてしまう危険が回避できる。

内容は、例えば大学という場を活かして、大学生対象の意識調査などのアナログ調査も良いであろう。たとえば、「発達障害に関する大学生の意識調査」「震災復興に関する大学生の意識調査」「トレーニングA法に関する大学生の事例研究」などである。こうした大学生相手の調査を修士論文のテーマにすると安易である。あくまでミニ調査研究あるいは、本論文のための予備調査にして、そのリサーチクエストや統計などの方法論を身につける機会にするのが、質の高い修論を作成できる基礎となる。

また、量的調査の統計処理のスキルもここで身につけておきたい。質問紙調査を行う過程で、どのような調査を行うか、リサーチクエストをもとに考えていくことになる。例えば、A群とB群の比較なのか（t検定、分散分析など）、大学生がある障害に対して持つ意識とは、どのような要因に含まれるのか（因子分析的手法）、どんなモデルで説明できるのか（構造方程式などの手法）、こうした経験をM1で体験し、発表する経験までしておきたい。その結果、新たな知見が見いだされ、それが学会発表や投稿論文につながることもある。

### (3) 事例研究を書く

量的研究や質的研究だけでなく、一事例の詳細な分析も重要である。特に社会人やスポーツのコーチなどで実践現場のある人にすすめたい。

筆者の経験を紹介すると、前述のレビュー論文（熊上，2008）を作成したあとで、まだ提示されていない論点がある事例を担当した。そこで、これを事例研究論文にまとめることにした。この事例研究論文は、アスペルガー障害を有する少年事件の事例であるが、新しい点として、少年の親にもアスペルガー障害に似た症状（ブロードフェノタイプと呼ばれる）があり、そのことが事件の背景要因や、事件発生後のトラブルを誘発している面があるので、かれらの適応改善のために、親のアスペルガー障害傾向に配慮して専門家が支援を行うことを提案した（熊上，2009）。

院生も、ぜひ事例研究の投稿にもチャレンジしてほしい。これにより、量的調査、質的調査だけでは表現できない実践家としての力量も高めたいところである。

## 4. 構想発表会や中間発表会の必修単位化

D2では博論のための調査研究、M2では修論のための調査研究をしなければ修了することができない。それをスムーズに行う手段として、D1とM1の年度末に「構想発表会」を開き、そこで研究構想を発表するとよいだろう。発表会は、レビュー論文の発表会も兼ねるような形で、先行研究のまとめを提示させ、それをもとに、どのように調査研究をすすめていくのかをプレゼンテーションする機会にする。フロア（教員や院生）との討論を通じて、調査研究の計画をさらにブラッシュアップすればよい。このプロセスをせずに中間発表会や予備審査会で調査計画の不備を指摘されても、取り返しのつかないことになりかねない。構想発表の時点で、不備を指摘されていたほうが、中間発表会や予備審査会の時には、きちんと理論武装してディフェンスできる状



態になっているだろう。

## 5. 学会誌への投稿プロセス

### (1) 紀要ではなく、学会誌に書く

論文の多くを紀要に出している院生がいる。これを見ると、なぜ査読付きのジャーナルにチャレンジしないのかと、疑問に思ってしまう。紀要は各学部が出している雑誌であり、査読付き論文としては扱われない。査読付きでないから、厳密な意味での研究業績にはならないとみられる時もある。

修士課程で社会に出る人であれば、紀要論文として残しておくのは必須である。しかし、博士課程を目指す人や、研究者を目指す人は、紀要に書くのではなく、査読付きのジャーナルに出さなければならない。

査読とは互いに匿名（国際誌では、査読者を指名できることもある）で論文審査を行うシステムである。容赦ないコメントで研究の不備を指摘され、何度も論文を往復させることにより、ようやく受理されるものであり、その苦労は並大抵のものではない。院生のうちは、ぜひこうした査読される経験を積んで、自分の研究が他の研究者から見てどのような不備があるか、あるいは強みがあるのかを知っておきたい。また、博論を提出する時も、査読付き論文の数が多いと有利であるし、出版助成をいただく審査の際も考慮されると思われる。逆に、博士論文の業績欄が紀要論文ばかりでは、評価されない。

研究内容を国内に広く知らしめたいのであれば、発行部数が多い学会誌がおすすめである。査読は厳しいかもしれないが、掲載されれば広く学界に研究内容が知られる。年に12冊、あるいは6冊くらい発行される雑誌であれば、投稿論文を常に求めているので、掲載の可能性は広がる。逆に、年に1、2回しか発行されない雑誌は、査読が甘かったり、半年たっても音沙汰がないなどのルーズさが見られる時もあるので、注意が必要である。

### (2) 英文誌はレスポンスが早い

研究結果が、国際的にも重要である場合は、国際誌に投稿すべきである。国際誌のメリットは、「査読が2ヶ月と早い」「電子ジャーナルのデータベースに掲載される」ということである。

査読が早いので、修論やD1での研究を、1年以内に査読付き論文として世に出すこともできる。また、査読者からの指摘も、明快なものが多い。逆に査読者の側で助けてあげようという気持ちもあまりないので、きちんとしたデータがそろわないと、受理されない（リジェクトされる）。

自分の分野の国内誌の発行部数が少なかったり、査読に1年近くもかかるような場合は、思い切って国際誌に投稿するのも一案である。

筆者も、これまで2編の国際誌への投稿経験がある。とはいっても、留学経験があるわけでもなく、英語力は人並みである。そこで、助かるのは、英文投稿サービスの利用である。

筆者が最近使ったのは、紀伊國屋書店が運営している「エディテージ」というサービスである。

「エディテージ」では、いくつかのサービスプランがあるが、筆者は「投稿から受理までサポートします」というシルバープランを使ってみた。費用は約8万円である。

このサービスの内容であるが、まず筆者が「人並み英語力」でたどたどしく英単語を調べたりしながら、英文の論文を書く。それを担当者にメールで送る。担当者はインドの人で、値段の安さはそこから来ている。しかし、この担当者のレベルはかなり高く、論文を読み込んでくれて、「ここをもっと詳しく研究手法を書くべし」「研究倫理委員会について触れるべし」「この考察の根拠を書くべし」などと英語でたくさんのコメントをつけてくる。それに答えるため必死で電子辞書と格闘しながら、投稿論文を仕上げる。

さらに、図表もきちんと投稿論文の形に直したり、指摘してくれる。

また、カバーレター（添え状）も大事である。この論文が、従前の研究と比較して、どのような新規性があり、社会的意義があるのかを説明し、査読をお願いする手紙であり、カバーレターの出来も重要だと言われている。これも、担当者が改訂してくれるし、電子投稿システムでの投稿まで代行してくれるのはありがたい。

こうした投稿支援サービスを使って投稿すると、2ヶ月後に編集長から査読結果のメールが来る。そこで、査読者からの指摘に逐一答えたレターと改訂論文を作成する。これが、第1稿を作成するよりも骨の折れる作業である。査読者からのコメントに対して、自分の論文をなんとかしてでも受理させるという気概を持って回答する。その際に、査読者の指摘を丁寧に受け止め、重要な論点であることを感謝し、そのうえで自己の考えや改訂した部分を述べるのである。このあたりのノウハウは、酒井（2002）に詳しく書いてあるので、参考にしてほしい。

こうしたプロセスを国際誌や国内誌で体験しておけば、博士課程の中間発表会や予備審査会でも、落ち着いて対応できるはずである。査読付き雑誌に投稿しない、あるいは仲間内の雑誌だけで投稿していると、厳しいコメントに対して、自己の論点を礼儀正しく主張する経験ができない。こうした点からも、博士課程の院生は、国際誌や国内のトップのジャーナルへの投稿経験が重要になってくるのである。

## 6. 大学院システムへの提言

3年またはそれに近い年月で博士課程が修了できるための方策をまとめると以下ようになる。

- (1) 構想発表会をD1、M1で必修単位にする
- (2) レビュー論文をD1の必修単位にする。
- (3) 修論を確実に学会誌に投稿する。
- (4) 査読期間が適切な（長期にならない）ジャーナルに投稿する

(3)の修論を学会誌に投稿する、という点を補足で説明しておきたい。先述のとおり、修士課程で社会に出る人であれば学内紀要に投稿して研究を形に残しておくことが大事であるが、博士課程に進む人は、修論を分割して投稿すると良い。たとえば、レビュー論文の部分、量的（また

は質的) 研究の部分、事例研究の部分などに分けて投稿する。うまく受理されれば、査読付き論文を3本得ることができる。

多くの大学院では、博士論文の提出の最低基準として、査読付き論文2本を課しているの、修論から2～3本出してD1の年度末までに受理されれば、早くも論文の提出基準は満たすので、精神的に余裕を持って、博士課程での調査研究にかかることができる。また、D1での詳細なレビュー論文を投稿、受理されれば、D3の始め頃には博論の序章に転用できる。このように、筆者の個人的見解としては、博士課程を3年で修了するためのポイントは、修論とレビュー論文をしっかりと書き、投稿受理させることである。

もちろん、修論だけで終わらず、博士論文で、自らの研究成果に新規性、有用性、再現性、社会的意義を発信しなければならない。だが、その基礎は修論にあるので、いま修士で博士課程を目指す人は、修論を必ず投稿論文レベルに仕上げるとの決意が必要である。

### D3年での修了計画

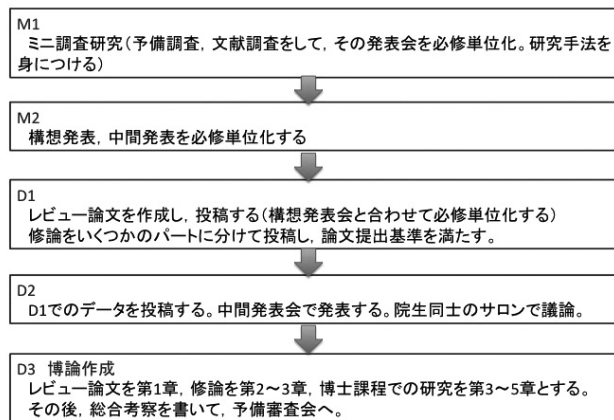


図4 博士課程3年での修了計画

#### (4) アカデミックサロンで切磋琢磨

修論や博論を書く作業は孤独であり、誰もほめてくれないし、お金がもらえるわけでもない。自分の研究の意義を信じて一歩ずつ進めていくのであるが、やはり互いにサポートする仲間が必要である。そして、その仲間と、議論をして切磋琢磨する機会が重要である。教員と研究室で議論するだけでなく、院生同士で自分の発表に対して議論をして、足りない部分を指摘しあったり、ディフェンスの練習をしておくことが、本番の発表会での自信になる。

そのような観点から、昨年度、有志の教員と院生とで、「アカデミックサロン」と称して、気軽な雰囲気ですぐ食をとりながら、互いの研究発表と議論を行う場を何度か持ってみた。そこで、発表会の事前練習ができた人は、実際の発表会でも落ち着いてできていたような印象であった。こうした「アカデミックサロン」をこれからも定期的に行ければと思っている。

## 7. 研究の社会的意義とオリジナリティ

本稿では、学位取得までの技術的側面について主に記載してきたが、やはり最後に強調しなければならないのは、研究の社会的意義である。なんのために研究をするのかといえば、学位をとるためではなく、社会の問題を解決したい、あるいは有用な方法を提案し人々を幸福にしたいという気持ちではないだろうか？

単なる資料の分析や紹介だけではなく、自分の研究がどのように社会の問題解決に役立つか、常にそれを自問自答しなければならない。そのためには、現場に立脚して、そこで発見した課題や方法を研究の形で明らかにすることが大切である。筆者個人としては、家庭裁判所に勤務していた時は、少年事件やアルコール・ギャンブルなどの依存症、発達障害などに関心を持ち、その課題解決のための研究をしたいと思っていたが、大学では、直接少年非行と接するわけではないので、学習や行動に困難を有する青少年への指導の在り方などを、実際の高校などと連携してすすめているところである。

加えて、福島県いわき市の裁判所での勤務経験もあるので、震災や原発事故の被災地における新たなコミュニティ形成支援の問題にも長期的に取り組み、現場に学びつつ、そこから明らかになった課題を社会に発信していきたいと考えている。

コミュニティ福祉学は、地域や職場、家庭、社会などあらゆるコミュニティにおける人々の幸福や問題解決をめざす学問として、その意義を再確認し、コミュニティ福祉学から巣立つ論文が社会の問題解決の発信のために役立てるように筆者自身も努力していきたい。

### 参考文献

- 阿部 彩 (2014) 『子どもの貧困2』岩波書店。
- 熊上 崇 (2008) 「広汎性発達障害を持つ触法事例の文献的研究」児童青年精神医学とその近接領域, 49 (1), pp.25-34.
- 熊上 崇 (2009) 「アスペルガー障害を有する触法少年の司法場面における行動特徴」児童青年精神医学とその近接領域, 50 (1), pp.16-27.
- 熊上 崇 (2015) 『発達障害のある触法少年の心理・発達アセスメント』明石書店。
- 酒井 聡樹 (2002) 『これから論文を書く若者のために』共立出版。
- 安田 節之, 渡辺 直登 (2008) 『プログラム評価研究の方法』新曜社。